

## オルタナティブスクールにおける〈公共性〉とコンフリクト

### —アメラジアンスクールを事例として—

#### 1. はじめに

本調査では、オルタナティブスクールにおける〈公共性〉の担保について、事例的に考察することを目的とし、データの収集と分析を行なった。多義的な意味をもつとされる〈公共性〉であるが、ここでは、他者による相対化を促す原理と定義しておく。

教育諸研究においては、オルタナティブスクールは既存の公教育制度が取りこぼしてきた教育ニーズを拾い上げるものであること、つまり、既存の「教育の公共性」を批判し拡張するひとつの市民社会セクターであることが指摘されてきた。しかし、それらの議論では、オルタナティブスクールが既存の公教育にとっての他者であるという点から、その〈公共性〉が説明されるものの、オルタナティブスクールそれ自身の〈公共性〉がいかに担保されるのかについては、議論の焦点が当てられることが少ない。つまり、他者としてのオルタナティブスクールについては強調するが、オルタナティブスクールにとっての他者について論じる視点に乏しい。しかし、本来、両者は共に吟味される側面であるはずだ。

オルタナティブスクールは、往々にして、保護者の参加と選択を重視する。また、既存の公教育制度では排除・周辺化されている教育ニーズをもつ、マイノリティの子どもたちを対象としていることが多い。そこで本調査では、かれらにとっての他者でありつつ、オルタナティブスクール内部の実践者でもある、教職員に焦点をあてた。オルタナティブスクールで働く教職員は、オルタナティブスクールにおける〈公共性〉の担保とどのように関係しているのかというのが、ここでの問いである。

#### 2. 対象の概要

本調査の対象は、アメラジアンスクール・イン・オキナワ(AmerAsian School in Okinawa. 以下、アメラジアンスクール)である。沖縄県宜野湾市にあるアメラジアンスクールは、母親たちによって結成された運動によって、1998年6月に設立された。主な対象は、アメラジアン(アメリカ人とアジア人の間に生まれた人)の子どもである。沖縄の場合、それは米軍基地関係者の男性と地元女性の間生まれた子どもであることが多い。

アメラジアンスクールでは、そのようなアメラジアンの子どもたちに対して、日米双方

の言語と文化を教え、ダブル・アイデンティティを育むことを目指す、「ダブルの教育」を行なっている。アメリカに対する反発と憧憬が渦巻く沖縄において、アメラジアンは、英語が話せないことによって自尊心を損ないがちである。母親たちはそれを危惧し、「ダブルの教育」を行なうアメラジアンスクールを設立した。このような設立の経緯から、アメラジアンスクールの運動言説において、〈母親〉の願いは幾度も言及されている。

また、アメラジアンスクールの設立後、母親らはその条件整備を求める運動を進めていった。そこで用いられたのが、〈多文化〉言説である。スクール設立後に運動に参加した研究者を言説生産者として、アメラジアンスクールが社会の多文化共生を進めるものであることが、行政や社会に向けて発信され始めた。それは、アメラジアンスクールに各種の資源が集まることに寄与した。

### 3. 調査の概要

2011年2月28日から3月27日にかけて、アメラジアンスクールでのフィールドワークが行なわれた。フィールドワークでは、主に日本語指導のボランティアとして日常的な教育実践に参加しつつ、そこでの実践の観察を行なった。参与観察の結果は、毎日フィールドノーツにまとめられた。当日の報告では、その期間に職員室や教室で見聞きされた事柄や、教職員に対するインフォーマルなインタビューを検討すると共に、適宜、以前の調査で行なわれた教職員へのフォーマルなインタビューを参照することにしたい。

### 4. 事例 … 省略（当日配布資料を参照）

### 5. まとめと考察

アメラジアンスクールの教職員は、〈母親〉の願いや〈多文化〉言説を、教育実践へと「転化」する試みを行なっていた。しかし、保護者層が入れ替わり、かつての〈母親〉の願いが希薄なものになるという変化が生じているなかで、教職員による「転化」の実践は、「ダブルの教育」を補完する別様の論理の模索も行なっている。アメラジアンスクールの教職員は、その多くが外部からやってくるが、「ダブルの教育」を補完する別様の論理は、他のコンテキストや組織を通過してきた、そのような教職員のバイオグラフィから引き出されている。オルタナティブスクールにおける〈公共性〉の担保は、このような教職員をひとつの回路として、果たされていると言える。しかし、それは同時に、オルタナティブスクールの集合的アイデンティティの定義をめぐる葛藤を孕んでいる。